

氏名(本籍)	おお 　 た 　　 けい 太 田 圭 (長野県)
学位の種類	博 士 (芸術学)
学位記番号	博 乙 第 2611 号
学位授与年月日	平成 24 年 7 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	日本画におけるマチエールとその表現技法の可能性について

主	査	筑波大学教授	博士(芸術学)	守 屋 正 彦
副	査	筑波大学教授		藤 田 志 朗
副	査	筑波大学准教授	博士(芸術学)	仏 山 輝 美
副	査	東京芸術大学准教授	博士(文化財)	荒 井 経

論 文 の 内 容 の 要 旨

(目的)

日本画では第二次世界大戦後のパンリアルなどの革新的な芸術運動のあたりから用いられ、現代の日本画では、凹凸のあるマチエールはいわゆる伝統的な表現に加えられた形で、伝統的技法にとらわれることない制作要素の一つとして位置づけられている。本論文は、そのような表現形態の受容の体制が、有史以来様々な支持体に描かれてきた日本美術の中に内在しており、さらに凹凸のあるマチエールは展示環境や展示形態の変化にもよることが想定される。このような変遷を経て描かれ続けている日本画について、その表現の可能性をマチエールを手がかりにして探るのが本研究の目的である。

(対象と方法)

マチエールを生み出す、紙や絹などの「支持体」と「絵具」等との物質的な関係をみると、それが、「表面」「内部」「裏面」のいずれかに含まれることがわかる。本論文で、著者は便宜上「表面型マチエール」(以下、表面型と表記)と裏面型を含んだ「浸透型マチエール」(以下裏面型と表記)と命名した。先行研究には部分的に日本画のマチエールに言及するも、体系的な論考はこれまで行われてこなかった。

そのため著者は 第 1 章で、「マチエールの諸相」と題し、基本的な「表面型」、「浸透型」の 2 タイプのマチエールの命名や成立の由来について総論的な解釈と作例を示し、それら二つの相違を「支持体の種類」と「ドーサ引きの有無」であるとした上で、作品制作では、この二つの選択が作品の制作方法と表現の方向性を決定づける要素であるとした。また、第 2 章では、「日本画におけるマチエールの材料」と題し、「支持体」「絵具類」「箔」「媒材」「ドーサ」等の基本的な素材について、特記に値すると思われる性質等に言及した。絵具類では、従来の絵具による、日本画らしい表現を再確認しつつ新たな表現研究の検討について述べた。箔、媒材についても現状と今後の可能性について述べた。本章でもドーサ引きの意味について言及したが、その有無が作品に及ぼす影響の強さを改めて指摘している。第 3 章は、「日本画におけるマチエールの技法」と題し、主として現代の日本画家による表現の実例を、できるだけ当該制作者の考えが現れている資料を添付して列挙した。第 4 章は「自作品におけるマチエール」と題し、1996 年から 2012 年までに制作した自作品について、「支持体」「使用した素材」「マチエールに関する考察」を共通項目として分析を行っ

ている。

(結果)

終章を本研究のまとめとし、「各章の概括」と「今後への課題と展望」を述べている。「各章の概括」では、マチエールを2つのタイプに体系化したことの意義と、これからの日本画制作におけるマチエール表現の様々な指標を得たことを挙げた。

(考察)

制作系博士論文として、様々なマチエール表現を用いたインスピレーションの具体化の一つとして作品制作における表現技法の研究を自己成果として考察し、研究の総括としている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

日本画におけるマチエールという言葉は戦後より一般的に用いられてきた。西洋画におけるマチエール技法と異なり、日本画においては、支持体と顔料、それを結び付ける膠によって成立する様々な表現技法を指してきたが、これまで日本画においてのマチエールという用語を体系的にとらえ、吟味解釈した論考はない。したがって当該論文は、はじめて日本画におけるマチエールを解釈し、一定の学術的な意義を有する独自性ある論文と言えよう。著者は日本画における新たな表現の可能性をマチエール研究に求め、その構造上の特性を考察し、これまで検討されなかった表面型と浸透型のマチエールを取り上げ、体系的な考察を試みた。この研究手法は日本画制作技法に基づき、「支持体」「絵具類」「箔」「媒材」「ドーサ」等の性質に言及したもので、学術的な技法研究を背景に研究を進めたものである。従来絵具による、日本画らしい表現を再確認し、箔、媒材、ドーサ引きなどの技法がもたらすマチエール表現が、作品に及ぼす影響について具体的に成果物を示し、実証的な研究となっている。著者は自らの制作を通して、これまで、体系化されず表現上の指針を導入できなかった日本画におけるマチエール技法について、制作上の具体的な成果を示しつつ、その可能性を指摘し、理論的な構築を成果としたことは、当該領域の学術上の進展に寄与し、新規で有用な結論を得たものと認めてよいであろう。

平成24年6月5日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

なお、学力の確認は、人間総合科学研究科学学位論文審査等実施細則第11条を適用し免除とした。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。